



ずいぶん前、新聞でシーボルトの娘「イネ」さんのことは新聞で読んだことがある。「へー。この人がシーボルトの娘のおイネか。」と思い記事を読んだ事があった。洋風の顔立ちで着物を着ていた写真があり大まかなイネさんの紹介が書かれていたように思う。



その記事を読みつつどんな人生を歩んだ人か興味は持っていた。

今回は上巻、下巻と長編小説であり、最近読んだ「水神」と同じような充実感があり、読み応えのある本だった。料理で例えるなら、さしあたり「ステーキ」っていうところ。

シーボルトの妻（遊女出合ったが妻同然の其扇。のちにお滝と本名を使っている。）とその子どもイネ。さらにイネの子どもタダ。のちにタカと名前を改め最後は高子と名を改めている。高子は医者にはならなかったが高子も波瀾万丈の人生で最後に高子の子、周三が医学を目指すであろう光が見えたところでイネ（伊篤）はこの世を去る。1823年から1903年までのイネを中心とした4世代にまたがるドラマである。

江戸時代（1603-1863年）末期から明治政府の成立が1868である。西洋文化に押されて日本の政治が大きく変わるまさに激動の時代である。イネは家族を取り巻く様々なアクシデントの連続、個人の生き方も大きく揺れながら激動の歴史の中で力強く賢く生き抜いたドラマだと思う。

時々、近世史を讀んでるのかしらと思うほど、時代背景の史実が克明に描かれていて過去に讀んだ「高野長英」や「高杉晋作」お思い出したり、自分の歴史認識のいい加減さを知り、じっくりもう一度読む必要があると思うが？？